

鐵 と 鋼 第十一年 第五號

大正十四年五月二十五日發行

論 說

内外製鐵事業の趨勢

(第十回通常總會開會の辭)

會長 河 村 驍

本日第十回通常總會を開くに當り聊か内外製鐵界の趨勢を概述し御参考に供したいと考へます。

(1) 各國鐵鋼生産能力

過日來開催せられました製鐵鋼調査會に於て本邦の製鐵鋼能力が何程であるかと云ふ事が問題となつた様に伺つて居りますが吾人の見る處では本邦現在の製鐵鋼能力は銑鐵に於ては熔鑛爐 100 噸以上のもののみを取り又製鋼に於ては 25 噸以上の平爐と之に八幡の轉爐を加へて製銑能力 130 萬噸内外製鋼能力 160 萬噸内外と見て差支なきものと考へますが今少し大きい問題で全世界の銑鐵及鋼の生産額は何程であるかと云ふに之は正確なる事は到底判然とは分りませぬが幸ひ本年 1 月 9 日發行の Iron and Coal Trade Review に英國の鐵鋼製造業組合の Director たる Sir William. J. Lark 氏の推定表が出て居りまして其大要を知ることが出來ました其數字は第一表の通りであります。

第一表 世界各國銑鐵及鋼製造能力 (單位千噸)

國 名	銑 鐵	鋼	國 名	銑 鐵	鋼
1. 米 國	52,700	59,000	6. ルクセンブルク	2,800	2,000
2. 獨 逸	12,000	14,000	7. 其 他 諸 國	(9,000) 5,000	(11,000) 5,000
3. 英 吉 利	12,000	12,000	合 計	(102,750) 98,750	(111,250) 105,250
4. 佛 蘭 西	11,000	10,000	乃 ち 約	1.02 億噸	1.1 億噸
5. 白 耳 義	3,250	3,250			

此の表は無論推定によるものではあるが或る程度迄は正しいものと信じます只米國以下六ヶ國の數字が掲げられ最後に其他の諸國として銑鐵に於ても鋼塊に於ても 5 百萬噸と推定されて居るのは餘り少ない様に思ふそれは第二表の 1913 年の統計を見ると能く分るのでありまして同年の統計によると其他の諸國は銑鐵 9 百餘萬噸、鋼 1 千餘萬噸になつて居る又一方から觀察すると銑鐵及鋼材の製造能力に對する實産額は 1923 年及 1924 共 6 割及至 7 割の間になつて居るので其他の諸國の製造能力を

括弧内の数字の通り鉄鐵 9 百萬噸鋼材 1.1 千萬噸となすときは産出高は矢張 6 割乃至 7 割の間にありて符合致すのであるから私は括弧内の数字の如く此表を訂正したのであります。

斯く此表を訂正して見ますと世界に於ける鉄鐵の製造能力は約 1.02 億噸で鋼材の製造能力は 1.11 億噸となり更に其内譯を見ると米國が飛放れて多量で之は横綱格である獨逸、英吉利、佛蘭西は三役格で其年々の成績次第で順番がきまる、白耳義、ルクセンブルグ等は前頭の筆頭格である最も戦前露西亞は鉄鐵約 448 萬噸鋼材 476 萬噸を産出して居りますが戦後は之れ等製鐵所の狀況を詳知する事が出来ず其近年の産額は鉄鐵 30 萬噸鋼塊 50 萬噸内外に過ぎない又埃地利は戦前鉄鐵 243 萬噸鋼材 258 萬噸を産出せるも戦後ハンガリー及チエコスラバキヤに分割の結果箇々の産額は百萬噸に達しないのである。

第二表 (甲) 主要製鐵國年別鉄鐵産出額 (鉄鐵) (單位千噸)

	1024	1923	1922	1921	1920	1919	1918	1917	1913
1. 米 國	31,000	40,026	26,851	16,506	36,401	30,579	38,437	38,165	30,653
2. 獨 逸	8,200	4,400	8,000	6,096	5,568	6,192	11,672	12,931	19,000
3. 英 吉 利	7,400	7,440	4,902	2,616	8,035	7,398	9,086	9,322	10,260
4. 佛 蘭 西	7,500	5,316	5,147	3,308	3,380	2,374	1,286	1,707	5,126
5. 白 耳 義	2,800	2,154	1,578	862	1,099	247	1	8	2,428
6. ルクセンブルグ	2,125	1,384	1,650	995	682	608	—	—	—
7. 其 他 諸 國	5,605	5,721	3,810	4,357	3,689	3,445	3,269	6,898	9,715
合 計	64,630	66,471	51,638	34,700	58,854	50,843	63,751	69,031	77,182

第二表 (乙) 主要製鐵國年別鋼産出額 (Steel Ingot & Castings) (單位千噸)

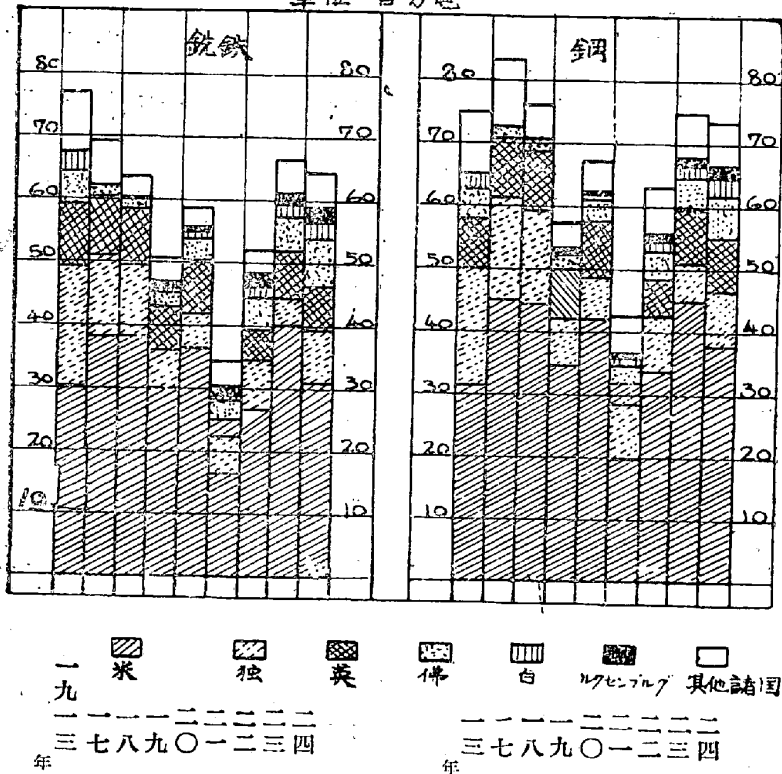
	1924	1923	1922	1921	1920	1919	1918	1917	1913
1. 米 國	37,800	44,944	33,603	19,744	42,133	34,671	44,462	45,061	31,301
2. 獨 逸	8,500	5,900	9,000	8,700	6,624	7,648	14,738	16,322	18,631
3. 英 吉 利	8,400	8,482	5,881	3,703	9,067	7,894	9,533	9,717	7,664
4. 佛 蘭 西	6,850	5,029	4,464	3,010	3,002	2,151	1,780	2,196	4,614
5. 白 耳 義	2,850	2,250	1,539	780	1,233	329	1	1	2,428
6. ルクセンブルグ	1,850	1,182	1,368	747	561	360	—	—	—
7. 其 他 諸 國	7,325	7,309	7,243	5,803	4,525	4,058	5,484	9,884	10,581
合 計	73,575	75,096	63,098	42,487	67,145	57,111	76,013	83,190	75,019

(2) 各國鐵鋼産額の變遷

過去數年間の各國鐵鋼産出額を戦前と比較すると第二表に示す通りで更に之を graphically に示すと第一圖の通りである。

産額を表はす處の数字も雑誌によりて多少の差違はあるが本表は本年 1 月 1 日發行の Iron Trade Review を基礎として製作せるものにて無論幾多の推定により定められたものと信じますが大體に正確なものとして此の表を取ると米國は 1913 年に約 3 千萬噸を産出し戦時中より戦後にかけて擴張又は新設の工場も澤山出来て今日の鉄鐵生産能力は第一表の通り約 5.2 千萬噸に達し 1917 年、1918 年

第一圖
主要製鐵國年別鉄鋼産額表
單位 百万噸

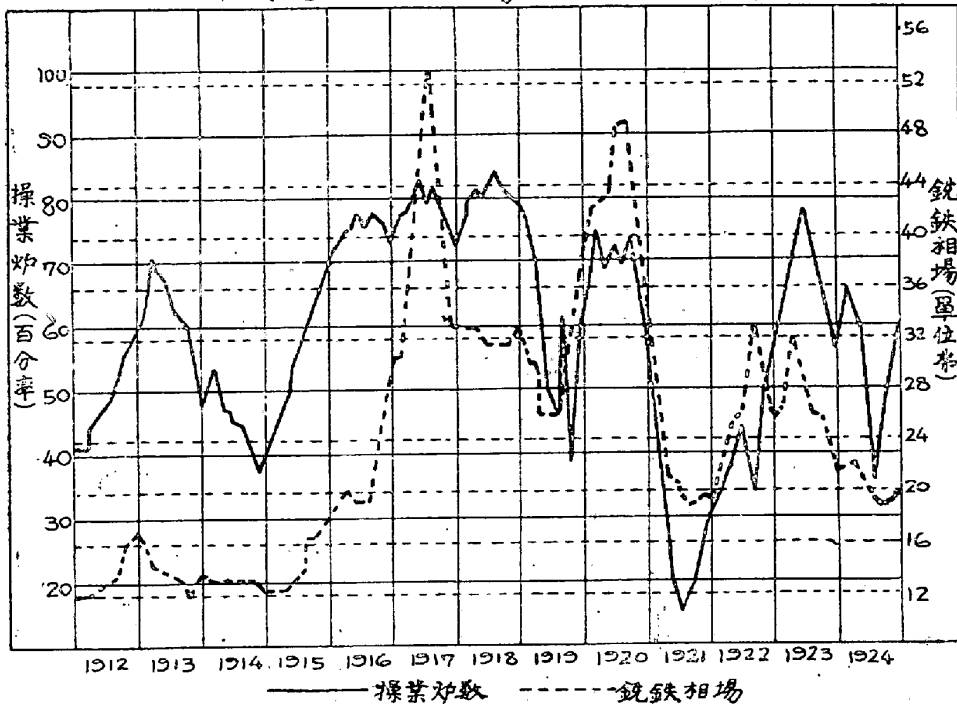


は相場も非常に高く共に 3.8 千萬噸以上を産出し1919年は戦後の第一年で市價が急に下つて産出量も 3 千萬噸に減じ1920年は丁度我大正 9 年に相當し所謂中間景氣で稍々恢復して 3.6 千萬噸となり 1921 年は世界的大恐慌時代で米國でもコールストライキや鐵のストライキが始まり終に 1.6 千萬噸迄減少し、1922年は尙ほ不況の域を脱せず1923年は一體に相場が高く從來のレコードを破つて 4 千萬噸に達し昨1924年は三月以後に於て急に相場が下り年末稍々回復の傾向を示したるも年間を通じて不況で

3.1 千萬噸に減じて居る、要するに米國は國が廣く原料の産地が遠く又製品の運搬にも運賃の高い不利な點はあるも石炭も鑛石も豊富で且つ設備が充分充實して居るので毎年の産額は一に經濟界の變遷鐵鋼の需用従て相場の變化によりて左右せられ一上一下して居るのであつて從來の歴史から云ふと 1923年の 4 千萬噸が最高の記録で生産能力 5.2 千萬噸に對比すると約 8 割弱に當る、之に依て見るも中々熔鑛爐を全能力に働かせて産出する事は六ヶ敷い事と想像される。

米國の鉄鐵相場と熔鑛爐操業數との關係は第二圖の通りで其高低が可なり能く一致して居る事を示すものである最も 1918年には政府の鐵鋼管理に依つて相場は下がつたのであるが相場が一年を通じて略ぼ一定して居るので矢張 3.8 千萬噸以上を産出した、畢竟製産の多少は相場の高低に大關係はあるが相場が一定して事業の安定なる事は製産條件として最も大切なる事が分るのであります又 1923年に於ける相場も必ずしも前年と比較して著敷高い譯ではなく 1917年 1918年に比較すると餘程低いのであるが一方事業の整理も出來て居るので産出が増加したものと想像せらるゝのである。次に獨逸は戦前 1913年には 1.9 千萬噸を産出して居る(此の産額中にはルクセンブルグを含む)戦時中は輸送の關係や職工の不足に原因する故障の爲めに産出は大邊減少して 1917年 1918年の産額は 1.2 千萬噸から 1.1 萬噸に下つて居る 1919年はベルサイユの條約の結果先づ 2.5 百萬噸の産出能力を有するルクセンブルグは獨立し約 3.5 百萬噸の生産能力を有するアルサスロートリンゲンに於ける製鐵所は佛國の所有に歸し約 1.5 百萬噸の能力を有するザール地方の製鐵所も佛國資本家の手に落ちて其代りにルール地方で多少の擴張を行つたけれども第一表の如く製鐵能力は 1.2 千萬噸に減じ 1919年の産額は其約 5 割の 6 百

第二圖
米國鉄鉄生産と相場ノ干係



萬噸を産出しそれから
1920年及1921年は略ぼ
同額で悪戦苦闘の結果
1922年には8百萬噸を
産出して居る。

茲で一寸佛蘭西の事
を申上げると佛國は19
13年に産出量は5百萬
噸であつた戦時中製鐵
所は甚しく破壊せられ
1918年には僅に1.28百
萬噸迄減少し戦後はベ
ルサイユ條約の結果に
依り新にロートリンゲ

ンの最新製鐵所を獲得しザールの製鐵所も其手中に歸し破壊せられた佛領ロレーンの製鐵所は遂に復舊せしのみならず面目を一新し設備は改良せられて戦後の鉄鐵生産能力は1.1千萬噸となつた。私は1920年に彼地に参り佛蘭西にて聞きし處に依ると其當時佛蘭西では大邊の意氣込で1923年迄には是非共9百萬噸の鉄鐵を産出する様にすると云ふ事であつたが中々實際はそう容易でなく1922年に漸く5百萬噸を出して居る然るに同年獨逸では前述の如く8百萬噸に達した之は佛蘭西としてはどうしても黙つては居られない全體佛蘭西は鑛石は非常に多量にあるが石炭が不足で殊に戦時中獨逸軍の爲めに炭坑を破壊されましたから一層石炭には困る。そこでベルサイユ條約に依り佛蘭西は所謂レパレーションコークスを獨逸より取る事になつて居りますが獨逸は言を左右に托して中々思ふ様に寄越さぬ。そこで佛國は遂に癩癩を起して1923年の1月に兵を進めて遂にルールを占領した此地方は御承知の通り石炭地方であるのみならず有名なる製鐵地であるが獨逸は之に對し消極的抵抗を行つた結果鉄鐵の産額は1922年から見ると甚しく減少して4.4百萬噸に下つた而已ならず政府は消極的抵抗による缺損を補給した爲めに多大の財政上の困難を來し馬克は非常に暴落した一方佛蘭西の方も石炭は豫想した様に取り事が出来ず鉄鐵の産額も餘り増加しない加之軍事費の失費多くつまり獨佛双方共利益がなかつた終に獨逸も1923年11月に至り(ストレーゼマン内閣の時)消極的抵抗を斷然止める事になり次で賠償委員會に於けるドース案の採用に依り歐洲の政情は安定するに至り經濟恢復の曙光も見え獨逸は1924年に至り鉄鐵の産出額は8.2百萬噸迄増加し佛蘭西も一躍して7.5百萬噸を産出し始めて英國の産額を凌駕するに至りました。

一體獨逸と佛蘭西とは一方は石炭を所有し他方は鑛石を所有して居るのであるから所謂共存共榮上

有無相通する事が得策で製鐵事業上互に相提携して行つて始めて兩國の製鐵事業は繁榮に赴くの運命にあるのである。そこで獨逸の事業界の大立物たりしスチンネスなども大に其必要を認め1923年に米國のゲーリー氏渡歐の節伊太利のロームで會見したのであるがこれはゲーリーの Personal Influence を利用して佛蘭西に説き勧めて貰ひ獨佛製鐵業者提携の實を擧げたいと云ふスチンネスの希望から起つた事と傳へられて居る。

話が少しく枝道に入りましたが以上は戦前に比し獨逸の産額が非常に減少し一方佛蘭西の産額が漸次増加して兩國の産額が漸次接近しつゝある徑路を説明したのであるが特に注意すべき事は佛蘭西の製造能力の増加はロレーン、ザールに於ける最新式の製鐵設備を取つた外に舊佛領ロレーンの方の復舊した製鐵所も何れも最新式のものに面目を一新せる事で又一方獨逸はロレーン、ザールを取られた爲めに製造能力は減少せるも製鐵業者は獨逸政府から代償金を得てルール地方に工場を新設し又は舊來の設備を改良したので之れ等二國の製鐵設備は何れも up-to-date に變つた事である。

次に英國はどうかと云ふと一體に保守主義の國柄であり製鐵事業に對しても同様に其設備は比較的古いのである。最も戦時中の必要から相當に覺醒し製鋼工場の方は餘程改善せられ新式の設備が増加せるに拘はらず熔鑪の方は餘り改善を見なかつたので將來大陸の設備との競争に堪えるや否やは英國でも大に憂へられて居るのである。戦前1913年には約1千萬噸の鉄鐵を産出したのであるが以後は經濟界の景氣の變化及鐵の市價によりて産額を上下し1921年は大なる同盟罷工が起り甚しく不況に陥り160萬噸といふ最低に落ちたのであるが其後漸次恢復し1923年と1924年との間には差したる變化もなく共に7百萬噸以上を産出して居る。白耳義は戦前242萬噸の産出なりしが戦時中製鐵所の大部分は破壊せられ實に慘憺たる有様で1917年1918年の産額は實に微々たるものにて1917年8千噸1918年1千噸の産出に過ぎざるが白國人獨特の勤勉に依り1920年私の渡歐當時已に戦前の4割乃ち約百萬噸迄恢復し尙ほ其の當時賠償金を引當にどし々々機械類を注文し復舊工事中で而も其設備は戦前の舊式のものをして最新式のものとなりつゝあるを見て私は歸朝後白耳義の製鐵業は所謂禍を變じて福となすもので戦前よりも立派なる工場として復舊し世界市場に雄飛するであろうと云ふ事を報告して置きましたが果して著々復舊工事も完成し産額も増加し1924年には戦前よりも多き280萬噸を産出して居る其勤勉努力の大なる事は敬服の至りであります。

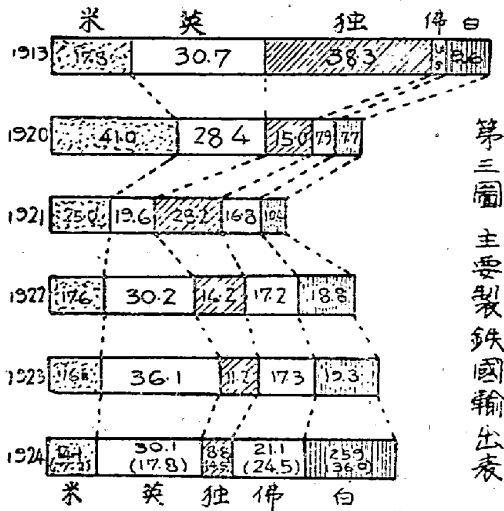
ルクセンブルグの製鐵業は1919年以來獨逸から獨立し其設備は戦時中少しも壞されて居らぬのであるから獨逸から來る處のコークス次第で段々産出を増加して1924年には2百萬噸以上に達しました同國は戦後獨逸との關稅同盟を脱し資本金も佛白兩國人の手に移り且つ1922年7月以後白耳義と關稅同盟を結ぶに至りました。

以上は主として鉄鐵に就て申述べたのでありますが鋼に就ても略ぼ同一の關係が成り立つて居るのであるから冗長を避くる爲め説明を略します。第一圖に依ると1924年に於ては米國が全世界の約半を占め残り半分を大體獨、英、佛其他の諸國で四分して其一を産出する様な狀勢にある事及び過去數年

間色々の變遷を経て大體各國共安定の位置に來つた事が伺はるゝのであります。

(3) 各製鐵國輸出の消長

世界の製鐵國たる米、獨、英、佛、白及ルクセンブルグの六ヶ國の輸出に對する勢力の消長は鐵の輸入國に取りては注目致さねばならぬ點でありますが第三圖は戰前1913年と比較して近年に於ける輸出の消長を表はすもので1913年には獨逸の輸出は全體の38.3%を占め第一位にあり第二位は英國の30.7%第三位は米國の17.8%第四位白耳義9.6%第五位佛國3.6%でありましたが戰後非常の變化を來し米國は一時大に増加せるが其後漸次減少し1924年には14.1%となり英國は中途減少して19.6%に下りそれから段々取返して最近1924年には殆んど戰前の割合に復し獨逸は戰前から見ると非常に減少を來し1924年には僅に8.8%となり之に反して白耳義と佛蘭西は大増加を來し1924年各々25.9%21.1%となりましたが乃ち第一位英國第二位白耳義第三位佛蘭西第四位米國第五位獨逸の順序となつた最も之れ等輸出國でも第三表に示す通りで、



に下りそれから段々取返して最近1924年には殆んど戰前の割合に復し獨逸は戰前から見ると非常に減少を來し1924年には僅に8.8%となり之に反して白耳義と佛蘭西は大増加を來し1924年各々25.9%21.1%となりましたが乃ち第一位英國第二位白耳義第三位佛蘭西第四位米國第五位獨逸の順序となつた最も之れ等輸出國でも第三表に示す通りで、

第三表 各國鐵鋼輸出入表(單位千噸)

國名	輸 出					輸 入				
	1924	1923	1922	1921	1913	1924	1923	1922	1921	1913
米 國	1,811	1,929.5	1,992.7	2,150.3	2,746	493	582.8	733.3	135.8	317
英吉利	3,843	4,319.7	3,401.1	1,696.9	5,049	2,480	1,321.8	881.8	1,640	2,231
獨 逸	1,216	1,339.5	2,516.4	2,110	5,664	874	1,732.2	1,861.2	621.4	284
佛蘭西	2,595	2,184.4	1,968	1,529.9	578	714	704.4	771.6	434.8	155
白耳義	3,290	2,501.6	1,715.7	903.6	1,546	530	546.1	503.1	514.2	827
合 計	12,755	12,274.7	11,593.9	8,390.7	15,583	5,091	4,887	4,751	3,346	3,814

御互に輸入し合つて居る處の數量も可なり多いので輸出入差引純輸出量の割合を求めると第二圖1924年の括弧内の數字の如く割合が變り順序も第一位白耳義第二位佛蘭西第三位英國第四位米國第五位獨逸となるのである以て如何に白耳義が戰後輸出國として重要な位置を占むるか々伺はれます但し白耳義の輸出量の内にはルクセンブルグを含んで居るのである。

右輸出國の内米國は一體製造工場から港迄の距離が遠く海外に輸出するには不便である代りに米國内地の市場へ外國から輸入するのも不便であり國內の産額は多量であるが輸出入共戰前から餘り多くない、重なる輸出先は加奈陀、日本、南米方面で歐洲に向つては競争する事は到底六ヶ敷い只戰後歐洲の製鐵事業が未だ復舊せず産額の少なかつた時代には已むなく米國の鐵を輸入したので米國の輸出が一時増加したのであるが歐洲が段々復舊するに連れて中々値段の競争が出来ないで輸出も従て減少するに至つた譯である。

英國は近年漸く戦前の割合に恢復して居るけれども佛國、白耳義等の設備が前述の通り最新式化されて居るので將來中々油斷が出来ない動もすれば大陸から來る鐵鋼の爲めに自國內の製鐵事業が壓迫さるゝ傾向があり英國の憂となつて居る様である。

獨逸の輸出は最近非常に減少して居りますが將來經濟界安定の上は設備がよいのであるから未だ多少増加するものと見なければなりませんが多量の安價品を輸出する事に就ては將來佛白兩國には叶はぬ、そこで獨逸は戦後量よりも寧ろ質の改善に努力し精巧なる加工品として輸出を計る計畫であると考へられます。

佛蘭西は生産力の増加と共に非常に輸出も増加して居りますが同國としては、どうしても國外に販路を開拓せねばならぬのである幸にベルサイユの條約によりまして戦後本年1月10日迄獨逸に對する鐵鋼の輸入税は無税の特典を持つて居たのであるが右の期限の満期と共に獨逸は戦前の5割増の重税を課せんとする意向があり佛蘭西は特別な協定を希望するので昨年來から色々交渉中でありましたが未だ決定に至りません此の問題の解決如何は佛蘭西の製鐵業の消長に大關係ある事と考へらる。

前述の如く之等の大製鐵國でも互に他國よりの輸入は免るゝ事は出来ません1924年の統計によると五ヶ國の輸出合計は約1.2千萬噸で輸入合計は約5百萬噸であるから差引約7百萬噸が五ヶ國以外の製鐵力の少ない國へ輸出せらるゝ事になつて居るのであるが之等製鐵國が full capacity で働いた場合を想像すると米國を除くも獨逸3百萬噸佛蘭西5百萬噸英國7百萬噸白耳義2.5百萬噸ルクセンブルグ2百萬噸合計2千萬噸の exportable capacity を有する事となるので後進國が之と對抗して經濟的に自給を計る上に於ては非常の奮闘努力を要する事を覺悟せねばならぬ。

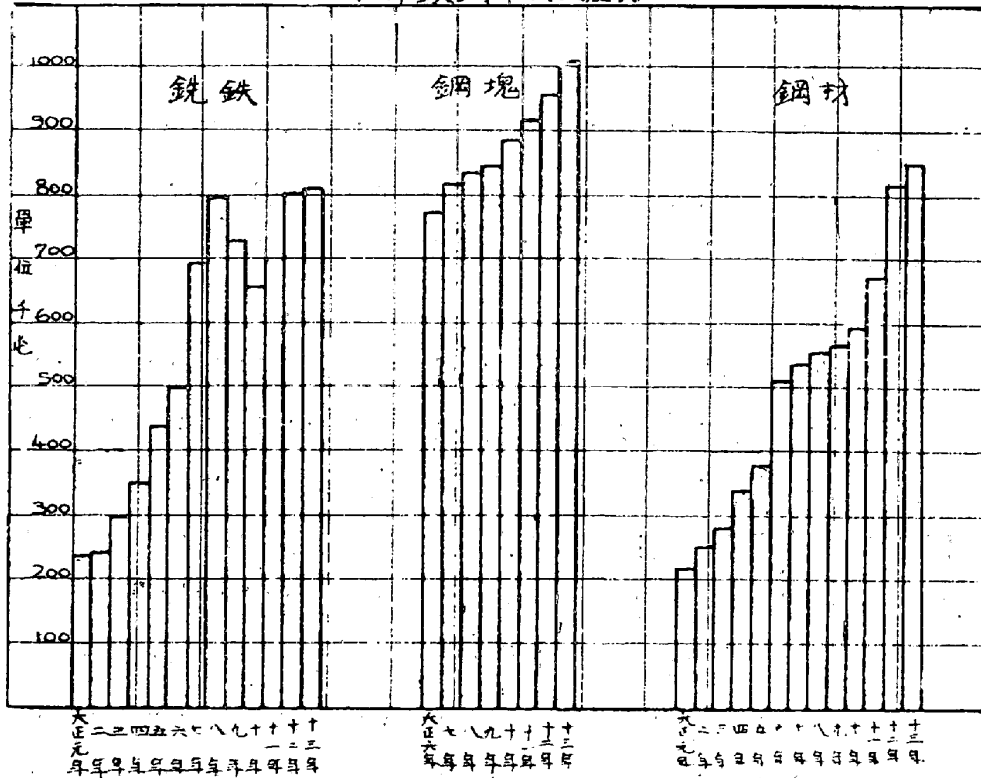
(4) 各國製鐵設備改良の概況

次に各國の製鐵設備の事ではありますが各國共大なる製鐵競争の爲めに製鐵鋼の規模は目下の需用から見ると工場を擴張し過ぎて居るのでありますがそれにも拘はらず尙ほ舊式のものを捨て、新式にすると云ふ様な意味で工場の新設及擴張が到る處に行はれて居る様であります殊に佛蘭西や白耳義の戦時中破壊された工場の復舊及獨逸がロレーン、ザールで失つた處の補充としてルール地方の製鐵所の擴張等は中々目覺ましきものでありますが尙ほ戦後生産費を切下げる爲めに部分的に行つた設備も改良も中々盛んなものであつて全般から大觀すると戦後數年間整理改良時代と云ふ事になると考へます一例を示すと米國に於て1924年中に新に竣工せる製鐵設備としては350噸爐一臺此の工程一ヶ年120,750萬噸、平爐85噸乃至100噸のもの16基此の能力一ヶ年111萬噸、ローリングミル大小67臺、箇様な増加になつて居りますが就中之等に比較して著大なる増加を見ましたのは Koppers の骸炭爐684基其製造能力4,297,500噸と云ふのでありまして之は不經濟な從來のピーハイブ爐を廢して最新式の副産物採集型を採用し生産費を切下げる爲めと考へられます。

(5) 本邦鐵鋼の生産及輸入

次に本邦に於ける近年の生産額は第四表の通りにして第四圖は之を graphically に表はしたるもの

第四圖
本邦鐵鋼年別生産表



である。

第四表 本邦鐵鋼生産高(單位噸)

年	銑鐵	鋼塊	鋼材
大正元年 (1912)	239,168	—	219,714
大正二年 (1913)	342,676	—	254,952
大正三年 (1914)	301,726	—	282,516
大正四年 (1915)	350,536	—	342,870
大正五年 (1916)	440,914	—	381,221
大正六年 (1917)	501,402	773,132	513,445
大正七年 (1918)	694,838	813,219	539,637
大正八年 (1919)	797,075	831,095	557,185
大正九年 (1920)	730,030	845,036	563,880
大正十年 (1921)	657,261	884,044	591,855
大正十一年 (1922)	702,331	917,534	671,504
大正十二年 (1923)	808,533	959,008	819,694
大正十三年* (1924)	±810,000	±1,010,000	±850,000

*大正十三年の産額は推定による

戰時中鐵價の好況と外國輸入品の杜絶並に金融状態の比較的有利なりし等に依り工場の新設又は擴張を見まして大正 7,8 年頃其結果が表はれ戦前に比較すると銑鐵に於ても鋼材に於ても大増加を來し其後銑鐵に於ては戦後の不況の爲め一時減少を來したるも此數年間當業者の苦心努力の結果整理は稍々其緒に就き大正12年の産額は大正 8 年より更に増加し大正13年は未だ統計が確實ではないが大正12年より更に幾分か増加せるものと推定せらる、鋼塊鋼材の方は少しく其趣を異にし逐年累増を來して居るのは我國で最も多量に製造する處の八幡製鐵所の第三期擴張工事が次第に竣工して其産額を遞増せるによるものと考へる。

斯くの如く我國の産額も近年大増加を來し尙極めて徐々ながら漸次増加の傾向を示して居る事は慶賀の次第なるが何分にも設備の改善を要するもの多く全設備が full に働く迄には前途遼遠であります。

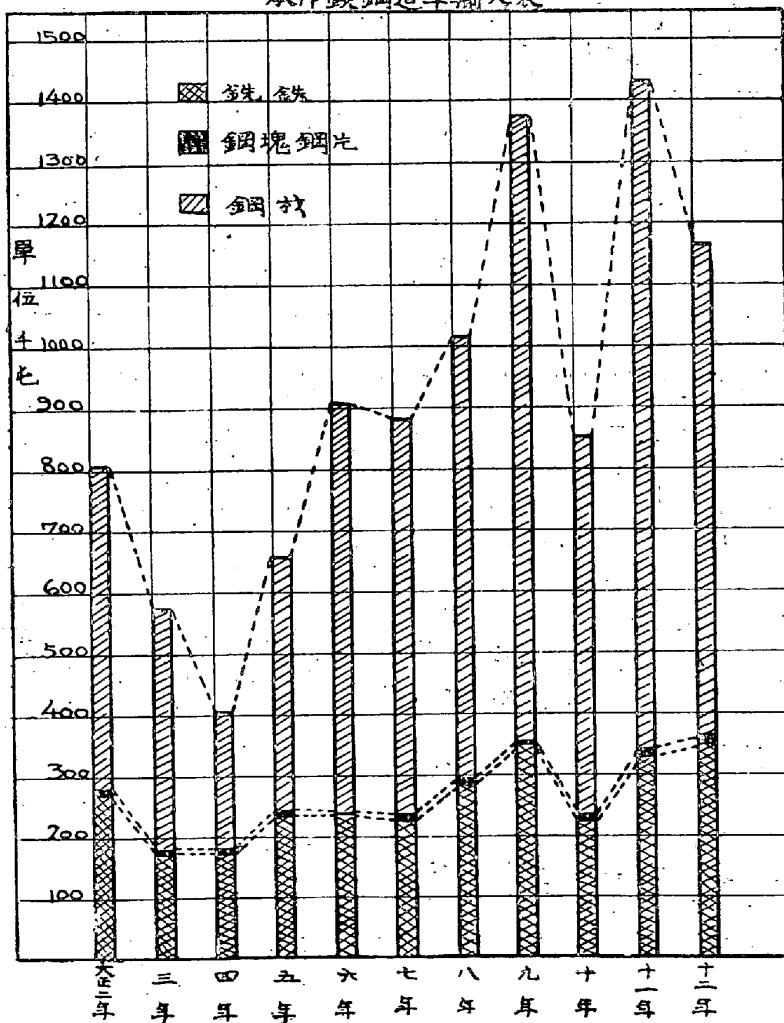
して遺憾ながら經濟上未だ其苦境を脱したものは認められませぬ。

それから本邦鐵鋼の輸入は第五表の通りで第五圖は之を graphically に示したものである。

第五表 本邦鐵鋼輸入表(單位噸)

	大正二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年
銑鐵	273,309	172,137	172,685	237,655	235,082	226,321	286,320	349,723	228,229	329,605	347,526
鋼塊鋼片	7,738	7,934	2,589	7,472	2,016	9,209	11,803	4,361	3,204	14,542	18,959
鋼材	529,266	395,988	232,926	416,708	672,743	650,341	721,831	1,024,743	625,629	1,088,447	796,847
合計	810,313	576,059	408,200	661,835	909,841	885,871	1,019,954	1,378,827	857,062	1,432,594	1,163,332

第五圖 本邦鐵鋼近年輸入表



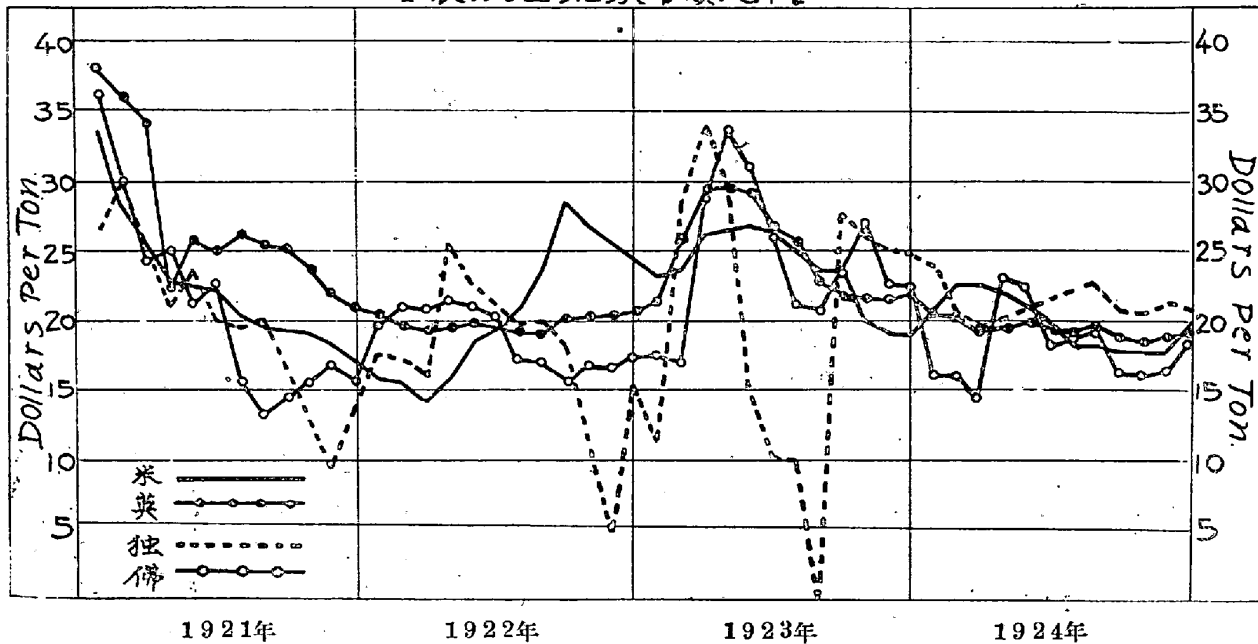
戦前大正2年に銑鐵約27萬噸鋼材約52萬噸を輸入し銑鐵の方は其後之よりも多少増加しては居るけれども大した事はなく一番多い年で34萬餘噸である鋼材の方では大正11年に最高108萬噸に達し戦前の約2倍に達して居る鐵鋼合計から申しますと戦前の鐵鋼合計81萬噸に對し大正12年は116萬餘噸で約5割の増加となつて居ります乃ち生産の方は大正2年から見ると大正12年は3倍になつて居るが輸入の方は一倍半である乃ち設備の新設又は擴張により輸入を減ずる事は出来なかつたが輸入の劇増を緩和せるの効果は確に製鐵業によりて擧げられて居ると見る事が出来ます。

(6) 各國鐵鋼の市價

各國の鐵鋼の市價に就ては何分に

も戦後の爲替相場の變動が多いので之を一定の標準に置いて比較する事が困難でありますが銑鐵に就ては第六圖に示す様な状態で此の圖は凡て弗に換算したものであります。1923年迄は各國市價共中々大なる fluctuation がありましたが1924年は各國共餘程安定して來て居る状態が伺はれます。1925年は經濟界の安定と共に多分尙ほ一層相場も安定するものと想像されて居ります兎に角目下の狀況では鐵鋼の外國の生産費も相當に高く Black Sheet の如き本邦に産出の少ない特殊品は別として銑鐵に於ても鋼材に於ても英米物は我國に輸入する事は餘程困難な事と考へられます只銑鐵に於ては印度銑

第六圖
主要製鐵國銑鉄市價比較



又鋼材に於ては歐洲大陸物が安くはいり動もすれば我市場が脅威を受くる恐があります印度鉄の安い事は無論原料並に勞銀の安値なる事、運賃に特別の割引がある等の理由によるのであるが鋼材の大陸物の安價なる原因として擧げられて居る處のものは獨逸に於ては1923年ルールの占領後事業界は非常の不況に陥り金融は硬塞し帝國銀行の金利は一時 9 割以上に達した事もある位で Stock として持ちこたへる事が出来難く生産費を切つて投資を始めた事、又佛白兩國に於ては爲替相場が輸出に便利なる事生活費の英米に比し安き事鐵道運賃の安き事戦争の結果として今日の標準から云ふと極めて安値な資本で大なる生産力を有する工場を手に入れた事等でありましたが戦後安價なる Scrap を多量に使用しつゝある事を閉却する事は出来ませぬ、獨逸のドルトムント市のカール、キングラー氏に依りますと獨逸の Scrap の使用割合は第六表の通りであります。

第六表 獨逸國屑鐵使用割合

年次	熔鑄爐 産出銑鉄百噸に付	鐵		鋼
		使用銑鉄 100 に對し	銑鉄及屑鉄合計に對する屑鉄	
1913	1.24 <small>噸</small>	56.6	36.1 %	
1917	11.28	75.5	43.0 %	
1919	12.30	80.5	44.6 %	
1920	14.90	84.4	45.7 %	

本表に於て1921年以後の數字が得られない事は遺憾であります此の表を以ても大體獨逸で屑鐵の使用割合が如何に戦時中より戦後にかけて増加しつゝあるか分るのであります、同國近年の屑鐵使用量は一ケ年 6 百萬噸に達し熔鑄爐及製鋼平爐の外鍊鐵製造及鑄物用として多量に使用されて居ります（尙ほ米國に於ても屑鐵の使用量は驚く可き數量で1923年には 2.4 千萬噸に達して居る様であるが其價格も中々高く鉄鐵との開きは 2 弗内外に過ぎない）。

それから英米に於ける生産原價の比較的高い事は勞銀其他原料品の價格の比較的高い事であつて且つ生産原價の高いに拘はらず鐵鋼市場の比較的低い事は鐵鋼業をして困難ならしむるものである英米の物價の指數が多少の差違はありますが概括して云へば戰前の100に對し160内外であるのに鐵鋼の市價は140内外であるから苦しい譯でありますが一方向から云ふと製鐵事業が他の事業に比し比較的整理が進んで居るとも云へるのである我國では物價の指數は200以上であるに鐵鋼の市價は外國の相場から推されて矢張り140内外であるから尙ほ以て困難な譯でありますが目下の邦貨の爲替相場の低い事は一時的ではあるが稍々外品の壓迫を緩和する一助となつて居るものと考へられる。

(7) 結論——本邦製鐵對策

扱て戰後過去數年間製鐵事業のみならず其他一般經濟界は整理時代でありましたが外國に於ては已に一先づ安定せるやに見受けられ従て製鐵事業も亦本年に於ては相當に景氣恢復の見込が立つて居る様である現に米國の有力者シュワップ氏の如きも色々の理由から1925年の製鐵界を樂觀して居る其重要な理由とする處は、(一)農産物の相場が高いから農村の購買力が増加し農業關係諸工業の需用が激増する事。(二)過去二三年間生産費の低減及配給の方法が研究されたから低廉なる價格を以て需用者の需用を充す事が出來やう。(三)鐵道の収益が増加して居るので鐵道の改善が企てられるであらう。

(四)大統領改選の結果政局は安定し今後事業家は安心して事業を經營する事が出來る事等である。

又歐洲方面にても一般に經濟界並に鐵鋼の相場が一層安定し従て漸次確實なる鐵鋼業の繁盛が來る事が豫想されて居る様であります。我國の經濟界は一昨年之の震災に依り一大打撃を蒙り之が恢復は中々容易の事ではなく製鐵界は勿論一般經濟界は一大覺悟を要する次第であります斯う云ふ困難なる場合に於て當然起る處の問題は企業組織を改善して能率の増進を計ると云ふ事でありまして戰後歐洲の整理時代に於ては幾多の企業聯合又は合同が行はれて居るのでありまして殊に各國內の合同問題のみならず歐洲全體の協同販賣と云ふ様な大仕掛の聯合が計畫されて居る程であります之は各國箇々の狭い見地から互に販路の競争をなす事に全體から逡觀して不利益であるから互に販賣の勢力範圍並に代價を協定して生産の割當及制限を行ふと云ふ主旨であります。我國に於ても戰後數年間鐵鋼對策は盛んに論議されまして已に本會でも再三製鐵振興策又は合同經營の審議機關の設置等に就きまして其筋に建議致しました事もあります。何等具體策の確立せらるゝ事なく今日迄經過し來りました事は遺憾の次第であります。かく從來永き時日の間議論を重ねられたのであるが特に昨年位我國内に於て此問題が新聞紙上及世間を賑はしたる事はないのであります。之は如何に製鐵事業の振興對策を樹立する事が時代の要求であつたかを想像するに餘ある次第であります。勿論多數の新聞記事の中には誠に根據もなき事柄が掲載せられて世人に幾多の疑惑の念を與へた場合もあります。全體から申しますと年を経るに従ひ議論が餘程穩健に近づきたる事が認めらるゝのであります。昨年末に至りて政府は農商務大臣の管下に製鐵鋼調査會を設けて國策の樹立を審議することになりました事は此の時代の要求に添へる適當の措置として歡迎する處でありまして仄聞する處に依りますと我國の製鐵事業は適當なる方法

を講ずれば經濟的に成立し得ると云ふ結論に達し其基礎の上に具體的振興策が講究されつゝある様であります。

本會に於ても此の事に就きましては數回評議員會を開き研究討議致しました結果無論設備の改善經營方法の改良に依りまして本邦製鐵事業が經濟的に成立する事は確信して疑はざる處でありまして之が振興上の具體的方策と致しましては製鐵事業其物の性質より考へ大規模の經營を有利とする事は議論の餘地がないので將來合同經營をなす事の必要を認めるものであります。本邦の製鐵事業は特に慎重に調査考究の上圓滿整然たる合同の効果を收むる事が必要でありまして先づ差當りの手段としては國內の當業者が互に胸襟を開いて共同の目的に向つて協力一致する事の必要を痛感するものであります。此際第七表に示すが如き共同機關を設置し、

第七表 製鐵鋼共同機關及其職務

第一 製鐵業共同研究機關

- (A) 内外利用し得可き製鐵原料の調査
- (B) 貧鐵砂鐵並に硫化鐵の利用方法の研究
- (C) 本邦に適切なる製鐵技術並に設備の研究
- (D) 官民製鐵所經營組織改善に関する研究
- (E) 作業能率増進の研究

第二 共同の原料購買及製品販賣機關

- (A) 外國産原料の共同購買並に其配給
- (B) 製品の共同販賣並に其按配
- (C) 輸出入鐵鋼の調査並に其調節
- (D) 製産品目の分擔割付並に生産割當或は製産制限

官民代表者及有識者を以て組織し、第一機關の調査に對しては官民製鐵所を經體的に開放して全般に亘り調査研究を行ひ、第二機關に於ては如上の職務を遂行するの外第一機關と協調を保ち設備の改善を要するものに對しては低利資金融通の斡旋をなし着々改善の實を擧ぐる事が最も適當なる措置なりと信するのである。

此事の詳細は評議員會の決議に依り意見書として製鐵鋼調査會々長始め委員の方へ差出し参考に供して置きましたので茲に其概略を御報告致す次第であります。

前述の如く外國では已に自國內の聯合とか合同とかの外更に進んでは各國同業者間の聯合と云ふ様な事迄計畫されて居る程であるのに左迄大きくもない我國の製鐵事業が各箇の間に互に蝸牛角上の争をなして居る時代でない、外國に對抗して國內の製鐵國策を樹立するといふ大目的の爲めに互に協同一致する事が最も肝要であると信ずる、此點に就ては今後朝野一般の方々の御考慮御盡力を煩はしたいと考へる次第であります。

尙ほ本會と致しましては第一研究機關の職務として擧げました様な研究の大部分に就ては豫て或は會誌に於て或は講演會に於てそれ々々討議研究致して居るのであります。尙ほ會員諸君の御盡力に依りまして今後一層此の研究を盛に致し幸に斯くの如き機關が出来ました際は大に之を援助し參考資料を提供したいと考へるのであります。尙ほ此外各國及本邦に於ける最近の技術上の進歩の狀況に就ても申述ぶるが本意であります。之れから本總會の議事があり、尙ほ今日は梅根君の面白き御講話もありませんから其點は省略致し、以上を以て本日の開會の辭に代へます。(終)